



1482年ごろの人類分布

人類学においてもアイヌを考えなければならないように、言語学、歴史学などの学問においても、アイヌを考えなければならないのではないか。つまり人類学の場合と同じように、アイヌの日本語も縄文言語から小進化したものであって、その進化の速度が、違っているにすぎないのではないか。

★ 梅原猛

梅原猛、  
アイヌの日本語が  
小進化 (1982)

記紀神話にみる原日本人と渡来者の混血

梅原 植原さんのお話をきいていて思いあたることが多いのです。きょう、じゅんじゅんとお話しくださった植原さんの仮説は他のジャンル、たとえば言語及び文化のジャンルでも成立するのではないかという予測をもつてきいていました。言語、文化の領域でも自然人類学における植原説と同じようなことがいえるのではないかと思う。

ひと言でいえば植原説はもともと日本列島には縄文人がいて、そこへ弥生の人たちが入ってきて、混血して和人ができた。そして和人もアイヌも縄文人を祖先にしなから、多少小進化の方向と速度が違ったために、和人とアイヌという違いができた。そしてアイヌのほうが、和人よりも縄文人的特徴をより多く保存しているということですね。じつは、古事記、日本書紀にそういうことを思わせる話がいっぱいできてきます。

記紀神話では外来者は、ホノニギノミコトのようにホがつくのです。ホというのはやはり稲の穂ではないか、稲作農民が外国からやってきて、まず九州に根拠地をつくって、混血し、それが大和に侵入していった世の古い伝承を記紀が神話のかたちで語っている。そして注意すべきこの系統の神話では、外来人はみな妻を土着民から娶っている。ホノニギノミコトが最初に娶ったのは、オオヤマツミノカミの娘のコノハナノサクヤヒメです。オオヤマツミは山の狩猟民ですね。稲作民がやってきて、まず山の狩猟民の娘を娶って、次の支配者、ホオリノミ

8 アイヌは日本文化の基層

コトすなわち山幸彦を生んでいる。その山幸彦が娶ったのは、今度はワタ(海)ノカミの娘、トヨタマヒメを娶って、次の支配者、ウガヤフキアエズを生んでいる。ウガヤフキアエズがまたワタノカミの娘、タマヨリヒメを娶って、神武天皇を生んでいる。したがって日本の最初の天皇といわれる神武天皇は、ホノニギノミコトの曾孫にあたりますが、母方はみな土着の血ですから、血量において八分の一になつてゐるわけです。

そしてその神武天皇の子の<sup>孫</sup>天皇が娶るのが土着のシキノアガタヌシの娘です。父方の系統は外来者であるけれども、母方の系統は必ず土着民である。これはやはり埴原説を血統の伝承という意味において裏付けていることがわかる。埴原さんたちの研究の結果と一致する伝承がそこに語られている。

それ以前に日本に住んでいたのはどういう人間であるか、これはむずかしい問題ですが、それは蝦夷という言葉で示される人間だったことはほぼ間違いない。大和からみて東蝦夷といえますから、愛知県以东には蝦夷がいたに違いない。ところが古事記のなかに大和にも蝦夷がいたということが一箇所でてくる。そうすると蝦夷というのはもともと東国に住んでいた人ではなくて、外来者、天つ神が入ってくる以前には大和にも住んでいたのではないか。蝦夷の地域がだんだん東へ東へと限定される。最初は日本全国、それから愛知県以东、そして関東、東北、そして最後に北海道。大和朝廷による日本統一とともに、蝦夷の国の範囲が、だんだんせまくなる。

その蝦夷という人種が土蜘蛛といわれ、あるいは佐伯といわれた。たとえば、常陸国風土記では佐伯と書いて、豊後国風土記では土蜘蛛と書いてある。しかし、佐伯も土蜘蛛も蝦夷もほとんど違わないのではないかと考えると、やはり日本には古くから蝦夷が住んでいたと考えるべきだ。蝦夷というのは徳川時代までアイヌであるというのが常識だった。その意味ではアイヌに近い人たちがずっと日本に住んでいたということになる。熊襲とか、蝦夷とか、多少は違うかもしれないけれども、彼らはほぼ同じ生活をしていただと考えられる。そうすると、人類学によって明らかになった埴原さんの説がじつは伝承とも一致してくるのではないかと思う。

ただ、戦後の日本史学はまったく伝承を信じない。津田左右吉は、仲哀天皇以前はまったく伝承を信ずるに足らずということで神武東征も日本神話も全部否定してしまった。それはことごとく真実だとは思えないけれども、つまり、記紀には明らかに、七、八世紀の政治支配者の意志が入っているが、それを差し引いても、どうしても否定すべからざる古い伝承が含まれてはいはないかと思う。だから今の埴原さんのお話を聞きますと、それはいわゆる記紀に伝えられる話ともやはりつながってくると思う。

埴原　そういう話をうかがうと、たいへん自信が湧くわけです。これからはまったくの想像なのですが、熊襲、あるいは隼人、これは大和朝廷によつて目の仇にされて、とくに熊襲とか蝦夷は征伐されるわけですが、熊襲にしても、蝦夷にしても、だいたい毛が濃いという記事が必ずついてまわる。ぼくは、それはある程度事実を語っているのではないかとひそかに思っ

場合が多い。欧米でもそうですし、日本でもそうです。たとえば日本の中国にたいする態度でも、昔は中国を先生と崇め奉っていたわけですが、日本が大陸経営に乗りだしてからは、中国人その他のアジア人に対して非常な偏見が植えつけられたわけですね。ヨーロッパの植民地政策でもそうですね。アイヌにたいしても小さな例ながらそういう偏見があつた。そしてそれがステレオタイプ化して心の中にしみ込んでいつて、知らず知らずのうちに態度なり、学説なりに表れてきたということは十分考えられますね。

梅原 私はその偏見はかなり歴史的に古くて、倭人社会の形成そのものにすでにそういう偏見が必要であつたのではないかと思う。つまり少数の人が入ってきて、土着の大多数を支配するためには、やはり土着民に対する優越感がどうしても必要である。自分たちを倭といつて、土着民を蝦夷という。

ところが蝦夷のなかでも、自分たちに従うものは全部和人のなかに取り込んでいく。そしてどうしても従わないものは蝦夷だといつて蔑視する。農耕化すればそれは和人になるけれど、どうしても農耕化しない、狩猟採集生活をいつまでも保持して農耕民の支配に反対する人間に区別される。

差別が、北海道では、ここ百年で非常に尖鋭な形をとつてエスカ  
考えないと客観的アイヌ認識は不可能である。

### 金田一理論の功罪

金田一さんは東北出身の人で、金田一という名前もおかしな名前ですからね(笑)。アイヌ語だと「山にいる人」という意味になります。だからどうも、自分の血の中にもアイヌの血が入っているのではないかという、そういう問題意識でアイヌ研究をはじめられたという。柳田さんが民俗学をはじめられたのも、自分の血の中に山人の血が入っているのではないかという意識から出発したのではないかと私は思う。私も仙台に生まれ、母方が漁業をしていたので、おそらく蝦夷の血が入っている。ある人は私のアイヌ研究を蝦夷の血のめざめであるといつた。

ところが、学問の出発点はそうだったのですが、日本は明治の終わりから、日露戦争に勝つて、文明開化もすすんでくると、大和民族の先天的優越性というようなものに日本人が溺れて



いなうらうづぐり(帯広郊外、大空団地、1982年)

いつた。その時点で、大和民族はアイヌと共通の祖先をもつということを発言することは、かなり勇気を必要とした。アイヌの神道と日本の神道はつながっているというようなことを、少しでも発言したら、自分の職業、地位もあぶない。あるいは場合によっては生命まであぶない状況の中で、自ら抑制がはたっているような気がしてしかたがない。

金田一さんの研究でも、初期のものには非常にアイヌに

3

対する共感が多い。しかしあとのほうのエッセイにはアイヌの女中さんが自分の家にやってきたけれど、キツネの頭を押入れの中へ入れてそれを拝んでいた、こんなのはかなわぬ、この女はよほどわれわれと考え方が違う、というふうなことを書く。ところがキツネの頭を拝むというのは、日本の古い習慣である可能性が非常に強い。しかしそういうことは、文明開化という視点に立てばとても認めることはできない。やはりアイヌは未開人であるとする。こんな未開人とわれわれは一緒ではないという、そういう意識が暗にその理論の根底にはたらいっていたように思う。

このことが日本ではずっとほんとうに反省されなかった。ごく最近まで反省されなかったと思う。結局、これまでは、児玉さんや金田一さんの理論が主流だったから、アイヌを研究するということは、それは日本人と関係のない異民族を研究することなのであって、それは日本研究になんにも返つてこない、アイヌ語を研究しても日本語研究には何も役立たないという考え方がずっとあった。金田一さんという偉大な学者がでて、その説を継承する知里さん、久保寺さんも、アイヌ語と日本語は何の関係もないといってしまうえば、それ以上やる人はいなくなってくる。そんなこともあってだんだんアイヌの研究者が少なくなってきた。

だから金田一さんというのは功罪二面をもっている。片一方でアイヌの研究を始めて、とくにそれまで記録できなかったユーカラをたくさん記録してくれた。これはたいへんな功績で、これからわれわれが金田一さんの恩恵にあずかるころは大である。しかし一方において、ア

イヌ語と日本語は違う言語だという、つまり人類学における児玉説と同じ役割をしてしまったところが、基本的にまずい。

だから私は、日本人、日本文化を考える場合、どうしてもアイヌの視点を入れてこなければならぬということアイヌの古老に話したら、アイヌの古老が私に、「いま頃わかったのか」という。「わしは昔からそう思ってた。ずっと昔にアイヌは日本から分かれて、アイヌ語も日本語とずっと昔は同じ言葉だと思ってた。わしはもうすでに五十年も前からそういつとるんじや。ところがシャモの学者はひとつも信用しなかった、いま頃少しわかるやつがでてきたか」と、アイヌの古老がいう。

私はこの古老の考え方は正しいと思う。この点ばかりはやはり和人の心のなかにある人種差別観を根本的に反省しなければならないと思う。

#### アイヌ——日本の基盤を支える精神文明

それからもうひとつ私がいいたいのは、埴原さんのおっしゃるように、日本人を東アジア全体の中ばかりでなく、ひいては人類史全体のなかになければならないという指摘ですが、今回、埴原さんの話をおききしていると、人類学はかなり広い時間のスパンで考えている。つまり三万年前とか、五万年前というのはまだほんとにこの間だということ。ところが、いままでの世界の文化史の見方というのは、どうしても記録を中心に考えてきた。そして、記録を文明の跡